

# 生活施設実習過程における実習生のモチベーション変動及び影響を与える要因\*

— 児童養護施設実習を経験した実習生の記録から —

川 島 恵 美<sup>\*1</sup>・川 本 健太郎<sup>\*2</sup>  
藤之原 綾<sup>\*3</sup>・峰 島 里 奈<sup>\*4</sup>

## 1. はじめに

近年、社会福祉士養成校の増加に伴い、社会福祉士養成教育のあり方が検討され、量・質ともに一定の養成教育水準を確保することが各養成校に求められている。社会福祉士援助技術現場実習（以下、実習とする）については実習時間、実習プログラムについて議論が繰り返されており、教育機関、実習施設・機関の連携のもとに各養成校にて領域別の実習プログラムが提案され始めている。実習プログラムを開発していくにあたって、実習施設・機関、大学、実習生3者間の共同作業が重要であることは触れるまでもない。そこでまずは実習生の視点から、実習経験について整理することから始めたい。実習において何を感じ、何を学んでいるのか改めて考察する。

実習への参加のモチベーションは学生様々である。稲垣（2005）は、「資格制度化以来、一部に将来専門職に就く予定はなく、“取り敢えず”資格を取得することだけを目的とする“資格取得目的型”実習が増加し、これにともなう“周囲同調型：皆が行くからいく”実習も増加した」と述べている。本学では配属する際に学生の実習へのモチベーションを確認するための個人面接を行っているが、上記のようなモチベーションの学生もあり、そのような場合は学生本人に実習へ行く意味について再度確認させている。しかし、学生にとって実習に行くかどうかは将来を考えた上での

決断となり、2年次で実習に行くかどうかの選択をすることは難しい。その結果、資格取得そのものを目的としたり、周囲に流されることは否めないのも現状である。また当初そのようなモチベーションで実習に行った学生が福祉の現場に魅了され、就職するというケースもある。逆も然りである。実習を通して、利用者の生の声に触れ、様々な経験をすることで、学生は大きな変貌を遂げる。現場での経験は学生に様々な刺激を与える。事前指導をする上で実習自体へのモチベーションを明らかにすることは重要であるが、同時に実習中にそのモチベーションがどのように変動していったのか明らかにすることも重要だと考えられる。

社会福祉実習、教育実習、看護実習等様々な領域で学生の実習へのモチベーションや実習経験が就職へのモチベーションに与える影響について先行研究が見られる（淵上、1994；野崎、1999；清水、1994；和田、2002）。しかし、実習過程における学生のモチベーションの変動について考察した研究は少ない。

そこで、本研究では、学生の実習に対するモチベーションが実習開始時から実習終了時までどのように変動しているのか、また学生のモチベーションの変動に影響を与えている要因は何なのかについて探索的に考察していくことを目的とする。施設種別により実習内容も異なり要因にも特徴が見出されると考えられることから、本研究では、まず対象を児童養護施設での宿泊実習に絞

\*キーワード：社会福祉援助技術現場実習、児童養護施設、モチベーション

\*<sup>1</sup>関西学院大学社会学部専任講師

\*<sup>2</sup>関西学院大学社会学部社会福祉実習指導室実習助手

\*<sup>3</sup>関西学院大学社会学部社会福祉実習指導室実習助手

\*<sup>4</sup>関西学院大学社会学部社会福祉実習指導室実習助手

り、学生の視点を通して学生のモチベーションの変動について検討していくことから始めたい。子ども達、施設職員、大学教員各々とのどのような関わりが、また実習内容が学生に影響を与えているのか実習日誌の記録を基に考察していく。

## 2. 児童養護施設実習について

児童養護施設実習における社会福祉士実習モデルの重点項目として「利用者に対する理解と支援」を挙げ子ども達との関わりを実習内容の項目として重視しているように（遠塚谷、2005）、実習に対するモチベーションを変動させる要因として当然子どもとの関わりに関する事項が主に挙がってくるだろう。

幸重（2002）は実習前から実習終了までのストレスとストレス反応を考察した上で、児童養護施設実習に行く学生に対してどのようなソーシャルサポートが必要かについて検討している。実習前半のストレスについて、宿泊実習による生活形態の変化、施設の食事、子どもとの関係、実習後半のストレスについては、子どもに対して注意や叱ることが難しい、施設内における矛盾や理論との開きに対するジレンマ等、施設の生活に慣れ、子どもとの関係が取れ始めたからこそ生じる悩みが挙げられている。また北川（1998）は児童養護施設実習の実習教育体制について学生に尋ねている。その中で「実習をして良かったと思うこと」について尋ねており、精一杯頑張ったという充実感の記述が目立ち、実習先での学習の密度の濃さ、施設理解の深まり、自己理解の深まりなどが報告されている。「学びたかったのに学べなかったこと」については親や家族との関わりを挙げる記述が最も多く、「実習中に困ったこと」については、寮舎による生活の違いや職員間の考え方の相違への戸惑い、一人で複数の子どもに対する困難、実習の意味や目標を見失ったことが挙げられていた。以上、子どもとの関わりや宿泊実習による生活自体の変化、学びが深まることによって感じるジレンマ等が考察されている。実習

中に感じたストレスや困ったこと、良かったことに関する要因は、モチベーションに影響を与える要因として挙がってくることが考えられる。

## 3. 研究方法

### 目 的

本研究の目的は、児童養護施設において、宿泊の形態で実習を実施した学生の実習期間中における、実習に対するモチベーション変動、及びそれに影響を与える要因を明らかにすることである。

### 調査方法

本研究では、モチベーションシート及び実習日誌を対象に質的調査を実施した。まず、モチベーションシート<sup>1)</sup>であるが、モチベーションを「人間の行動に働きかけている原因（要因）や、その働きかける流れ」（桜井、2004）として捉え、実習生のモチベーション変動を可視化することを目的に開発に取り組んだ。モチベーションシートは実習生のモチベーションを「視覚的に時系列で変動を見る」ことを可能にしている。シートの構成は、基本属性（氏名、実習先施設・機関名、実習期間、実習形態（2週間、4週間、通年））、実習前（実習計画<sup>2)</sup>～実習開始まで）グラフ・要因（記述式）と実習形態に応じた実習中グラフ・要因（記述式）である。グラフは、横軸を時間軸とし縦軸をモチベーションの高低としている。今回の研究では、実習中グラフ・要因（記述式）について分析を進めていく。

次に実習日誌は、モチベーションの変動が見られた時点での実習生の置かれている状況や実習生自身が考え感じたことを把握するために分析対象としている。

実習日誌の構成は、A4用紙一枚表裏であり、表面には、一日の目標、午前・午後の実習内容の概要記入欄（箇条書き）、観察した事実（客観的側面）及び気づきや疑問（主観的側面）となっている。裏面は、本日の活動に対する考察、今後の取り組み課題の記入欄があり、実習先担当者か

1) 「モチベーションシート」の開発については、特定非営利活動法人 ブレインヒューマニティの「ボランティア振り返りシート」を参考にしている。

2) 実習事前指導として、実習生は2年次後期に「社会福祉援助技術現場実習計画」という科目を履修する。

ら、指示・講評を頂戴し、これを日誌上でのフィードバックとしている。

### 調査対象者

本学において、2006年4月～2007年3月までの期間に、社会福祉援助技術現場実習を履修した社会福祉学科に在籍する学生であり、児童養護施設において宿泊での配属実習を4週間集中的に実施した学生5名を対象としている。各実習生の実習先施設の概要及び実習内容は表1の通りである。

モチベーションシートについては、実習終了後全員に配布し社会学部実習指導室にて回収した。また、学生全員に対して、個人情報保護の観点から、調査票の冒頭で研究以外での使用はしないことを明記し了承を得ている。

なお、実習日誌、モチベーションシートについては、回収後、本学社会福祉学科教員以外の閲覧は禁止し、本学社会学部実習指導室にて鍵のついたロッカーに保管している。

### 分析方法

今回の分析の目的は、実習日程（時間軸）に沿って、実習生のモチベーションの変動及び各場面において影響を与えた要因を明らかにすること

である。そのため、モチベーションシートの分析方法として、実習生のモチベーション変動をグラフ横軸（時間軸）と縦軸（モチベーションの高低）から読み取る。但し、縦軸（モチベーションの高低）は、視覚的にベクトルの振れ幅を確認するためのもので、得点化しているわけではない。したがって、モチベーションシートについては、①横軸の時系列に沿って、縦軸の高低を読み取り、モチベーションシートに記載された要因の「要約的内容分析」により説明している。また、影響を受けた時点（要因）の実習日誌<sup>3)</sup>を選択し、②実習生の行動を明らかにするため、実習日誌については、「説明的内容分析」を試みた。

表1：実習先施設概要及び実習内容

	性別	実習期間	実習先施設 概要	実習内容
実習生A	女	8月初旬～9月初旬	大舎制、地域小規模児童養護施設等運営	幼児・学童・生活（家事）担当、おやつ実習、行事参加、設定保育、職員会議参加、同法人施設見学
実習生B	女	8月下旬～9月下旬	小舎制、乳児院等を併設	学習指導、家事支援、レクリエーション企画、併設施設見学、自立支援計画作成
実習生C	女	7月下旬～8月下旬	中舎制・小ホーム制、保育園・児童家庭支援センター等を併設	学習指導、家事支援、職員からのスーパービジョン、厨房実習
実習生D	男	8月中旬～9月中旬	中舎制（男子棟・女子棟・幼児棟）、ボランティアセンター等を併設	各棟に配属、炊事など家事支援 学習指導、併設施設の見学
実習生E	男	9月初旬～9月末	中舎制（男子棟・女子棟・幼児棟）、ボランティアセンター等を併設	各棟に配属、炊事など家事支援 学習指導、併設施設の見学

\*実習生D、Eの実習先は同施設である。

3) 影響を受けた時点での日誌：モチベーションシートから正確な時点を導き出すことは、困難である。そのため、妥当性を高める行為として、影響を与えた要因の時点の周辺日程に当たる日誌を抽出する作業、また内容分析を筆者ら全員の合同作業により実施している。

## 4. 分析結果・考察

### 実習生 A (グラフ①)

#### 〈分 析〉

実習開始直後のモチベーションは非常に高くなっているが（要因①）、実習初日の日誌から、子どもの試し行動により「戸惑い」、「困った」様子が読み取れる。その後も頭では子どもたちの急な態度の変化が試し行動であることや、自分自身の気持ちを素直に表現することの必要性等を理解しているが、実際の行動には移すことができず、「しんどさ」を感じている。子どもたちとの関係作りがうまくいかないことを大きな要因とし、また常に気の抜けない宿泊実習という生活面での「しんどさ」も加わり、実習全体に対するモチベーションの低下が見られる（要因②）。

実習 1 週目が過ぎたところで、初めての休みをもらい、自宅に戻り心身ともにリフレッシュできている。また、実習のヒントになるような文献・資料を読み、体験してきたことを理論的に意味づけることによって、気持ちを切り替えることができていく（要因③）。

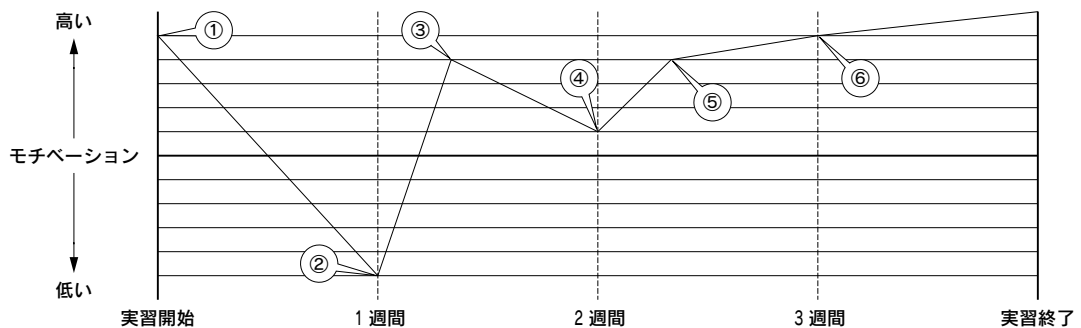
実習も中盤になるが、本人が満足できるような

子どもとの関係作りができていない状態で中間巡回指導の日を迎える。その中で、実習担当者から子どもとのコミュニケーションについて指摘を受け、改めて「ありのままの自分」を出せていないことに気づかされている（要因④）。2 度目のモチベーション低下を経験しているが、また休みをはさむことで、モチベーションの回復が見られる（要因⑤）。

3 週目に入り、徐々に自分の気持ちを子どもに言葉で伝えることができるようになり、日誌にも「コミュニケーションが取りやすくなった」という記載が見られるようになる（要因⑥）。また、これまでの日誌では、実習生本人と子どもの 1 対 1 の関係について書かれていることが多かったが、実習生本人よりも施設生活については子どもたちのほうが先輩であるということを尊重した声かけの必要性や、大舎制のメリット・デメリットにも気づき、視野が広がってきていることがわかる。このように、「子どもとの関係」から少しずつ視野が広がってきたきっかけとして、おやつ作りや、入浴など、生活場面での何気ない関わりの中で、「実習生」、「援助者」というよろいを取り去り、実習生本人の「ありのままの姿」を表現できたのではないかと考えられる。また、夜店出店

### 実習生 A (グラフ①)

■実習開始から実習終了までの自分のモチベーション変動



\*変動グラフのピーク（山または谷）にそれぞれ番号をつけてください。

①	実習開始直後はやる気に満ちていた。
②	子どもとの関係作り、実習生活のしんどさに悩み、最初の休みまで辛かった。
③	休みの日に実習のヒントになるような本、資料などを読み、もう一度頑張ろうと思って施設に戻る。
④	なかなかうまくいかず悩む。中間指導で「子どもとのコミュニケーション」を指摘され、どうすればいいのか悩む。
⑤	休んでゆっくり息抜きをして、また頑張ろうという気持ちになる。
⑥	だんだん子どもたちとのコミュニケーションもうまく取れるようになり、1日1日が充実したものに感じられるようになった。

の手伝いなどの行事参加を通して、普段の子どもたちとは違った一面を発見する機会を得ている。

生活施設である養護施設だからこそ、「援助する」と構えず、日常生活の普通の場面に寄り添うこと、また時には、行事等に参加することで、普段の生活からは知り得ないことを発見するというのが、実習生にとって貴重な体験となっているのではないだろうか。

### 〈考 察〉

実習生 A の場合、子どもたちの前で「ありのままの自分になる」ことが常に課題となっていた。実習生自身の頭の中で思い描く子どもたちとの関係と、現実にはギャップがあり、これまで学んできた専門的知識が、むしろ「ありのままの自分」を表現することへの妨げになっていたのではないだろうか。

この打開策となったのが、おやつ作り等の家事・生活場面である。「子どもたちと向き合うぞ」と力を入れずに、普段の生活の当たり前のことをしながら、何気なく交わす会話の中で、徐々に自分を表現していくことができたのだと思われる。

そして、モチベーション変動の一番の要因であった「子どもたちとの関係」がうまく取れるようになると、「子どもの捉え方」に変化が見ら

れ、子ども同士の関係や、子どもと施設について等、視野が広がってきていることがわかる。

### 実習生 B (グラフ②)

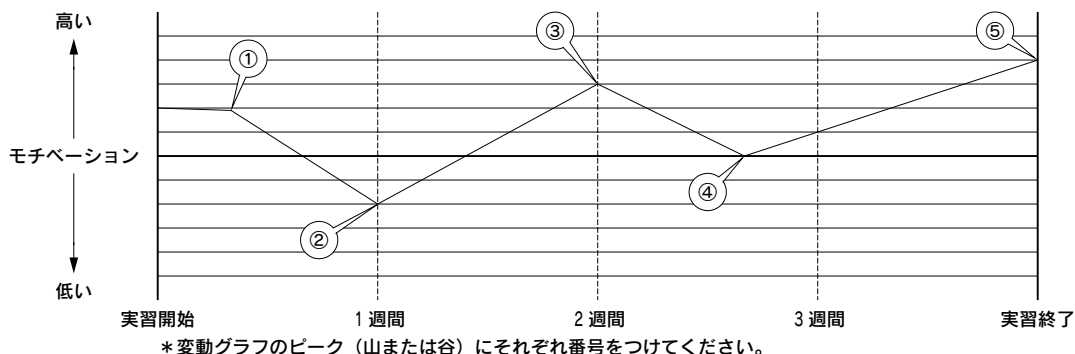
#### 〈分 析〉

実習開始直後から、不慣れな環境に戸惑うこともあったようだが、実習を楽しもうという気持ちは見られる (要因①)。

しかし、1週間が経過する頃、子どもたちとの関わりに難しさを感じ、モチベーションが低下している (要因②)。この背景には、実習生本人がこれまでの経験の中で、子どもから邪険に扱われたことがなかったというギャップがある。また、小舎制の養護施設において、子ども同士の関係性も考えた上で接することの難しさも感じていることが読み取れる。その中で、「実習生の私ができることは何か」ということを考え始めている。子どもたちから口癖のように「実習生のくせに」と言われることにより、それを逆手にとって、「実習生」だからこそできることを見つけようと意識を変えていることが伺える。その一歩目として、子どもたちを「注意する」、「叱る」だけではなく、子どもたちの良い所に目を向け、「褒める」関わりを心がけている。また、「外で遊びたい」、「おにぎり作って」など、日常的で身近なことに、

### 実習生 B (グラフ②)

■実習開始から実習終了までの自分のモチベーション変動



①	実習が始まり、戸惑うことが多かったが、楽しむこともできた。
②	子どもとの関わり方で難しいところがあり、落ちこんだ。
③	少しずつ子どもともうまく接することができるようになり、施設での暮らしも慣れてきた。
④	実習は楽しいが、このままでは楽しいだけで終えそうという不安があった。
⑤	職員さんのアドバイスや自立支援計画表を書かせてもらうことでモチベーションが上がり、そのままの状態で実習を終えることができた。

間をおかず対応できるのも実習生だからこそではないかという気づきを得られている。

そうするうちに、実習中間地点では、子どもたちともうまく関わりが持てるようになり、モチベーションも上昇している（要因③）。

その後も子どもたちとの関わりを中心として実習を進めていくが、徐々に慣れが出てきたこともあり、「楽しいだけ」で実習を終えることに不安を感じている（要因④）。ここで、職員からのアドバイスを仰ぎ、「自立支援計画」を作成させてもらえることになった（要因⑤）。こうした機会を与えられることで、専門職として子どもたちに関わっているという実感が持てたのではないだろうか。この経験や1ヶ月間の実習を通して、「長い目で子どもを見ることの大切さ」を学んだと日誌を締めくくっている。

このように、ただ子どもと関わるだけでなく、その延長線上にはその子の将来があるということを実感する経験ができることで、関わり一つ一つの意味を考えられるようになるのではないか。

## 〈考 察〉

実習生 B についても、実習開始から子どもた

ちとの関わりに戸惑い、「実習生」という立場に苦しみられていたことがわかる。そこから、「実習生だからこそできること」を見つけ出そうという意識の転換を図っている。そして、日常的で些細なことも、援助関係を築いていく上で重要なことであると気づくことができた。

実習中盤を過ぎ、子どもとの関わりに対して前向きになれると、次第に実習が楽しく感じられてくるが、そうするとさらなる欲求が生まれてくる。

そこで、「自立支援計画」を作成する機会を与えられ、児童養護施設の重要な役割である子どもの将来を見据えた支援の大切さを学んでいる。このように、同じ子どもたちと関わっていても、ソーシャルワーク的な視野を持って捉えることを体験することで、実習に対するモチベーションも上昇すると言えるだろう。

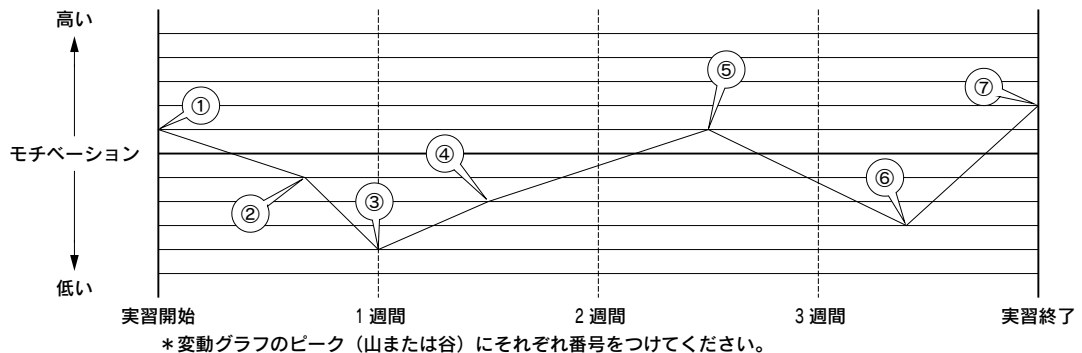
## 実習生 C（グラフ③）

### 〈分 析〉

実習開始直後は、大勢の子どもたちを相手にすることの大変さや、子どもの言動に対する制限範囲がわからず、職員の動きや施設での生活を観察することから始めている（要因①）。

## 実習生 C（グラフ③）

■実習開始から実習終了までの自分のモチベーション変動



①	実習が始まり、施設の生活リズムや子どもたちの様子、職員の方たちの指導の仕方を観察していた。
②	施設の生活が子どもたちにとって厳しすぎるのではないかと職員の方の様子を見ていて感じた。
③	体調を壊してしまった。
④	施設の生活にも慣れ、職員の方ともうまくコミュニケーションをとることができてきた。
⑤	子どもたちと関わるのが毎日楽しかった。
⑥	自分のやり方がこれでいいのか不安になり、面会後の子どもたちの落ち着きのなさに困っていた。
⑦	職員の方が私のために多くの時間を割いてくださったり、色々な経験をさせていただいて、とても良い実習だったと感じた。

観察しているうちに、施設の生活が子どもたちにとって厳しすぎるのではないか、また職員の子どもたちに対する厳しい指導に疑問を抱き、同時にモチベーションが若干低下している（要因②）。しかし、この「厳しさ」は、子どもたちの成長、自立を考えた上でのものであると考え、「長い目で指導を観察していきたい」と日誌に記している。

実習開始から数日後、体調を崩したため、実習をしばらく休むことになり、モチベーションが下がっている（要因③）。

その後体調も回復し、実習に復帰すると、徐々に施設の生活にも慣れ、職員ともコミュニケーションを図れるようになったことで、モチベーションの回復も見られる（要因④）。日誌からも、職員から子どもたちの家族について話を聞いたり、日常の家事、子どもたちとの関わり方等についてよく質問していることが伺える。それに対してきちんと答えていただき、その場で解決することができた経験が、その後の実習にも影響しているのではないだろうか。

実習中間を過ぎ、「子どもたちや、生活リズムなどに慣れ、余裕が出てきた」と日誌に記載があるように、毎日の実習を「楽しむ」余裕が出てきたことがわかる（要因⑤）。

しかし、夏休みの帰省のため、子どもたちの出入りが激しく、落ち着きが無くなっている状況に直面し、再度モチベーションの低下が見られる（要因⑥）。この頃の日誌には、「子どもたちに好かれるために仕事をするのではないと考えてはいたが、どこかに子どもたちに好かれようとしている自分が常にいるを感じた。自分自身が子どもを好きであるということをもっと強く意識したいと思った」と書かれている。また、「自分が一人の大人であるという自覚が足りなかった」との記載もあり、実習終盤で子どもたちと関わる際の自分自身の姿勢に直面している。

さらに、この時期には厨房での実習もあり、材料や出来上がったもの一つ一つを検食として2週間保存していることを知り、「責任を持った仕事をしなければならないと感じた」と記している。子どもとの直接的な関わりを持つ以外のところでも、子どもたちに対する責任の大きさを実感する

ことができたようである。

実習中の様々な経験を通し、また職員からタイムリーで的確なスーパービジョンを受けることのできる関係を築けたことによって、1ヶ月間で最もモチベーションが高い状態で実習を終えている（要因⑦）。

## 〈考 察〉

実習生Cも実習開始直後は子どもや施設の生活に戸惑いを覚えている。徐々に慣れてきた実習中間頃にも、子どもたちとの関わりで壁にぶつかり、「子どもたちにどう思われるか」ではなく、「自分の気持ちの大切さ」に気づくことができていく。

また、厨房に入るという経験により、直接的な関わりを持つことのみが子どもに関わることでなく、様々な形で子どもの安全、成長に携わっていることを感じ取っている。

実習全般に渡って、疑問に思ったこと等を職員に尋ねることで解決しており、「職員との関係性」も実習へのモチベーションに大きく影響する一つの要因であると考えられる。

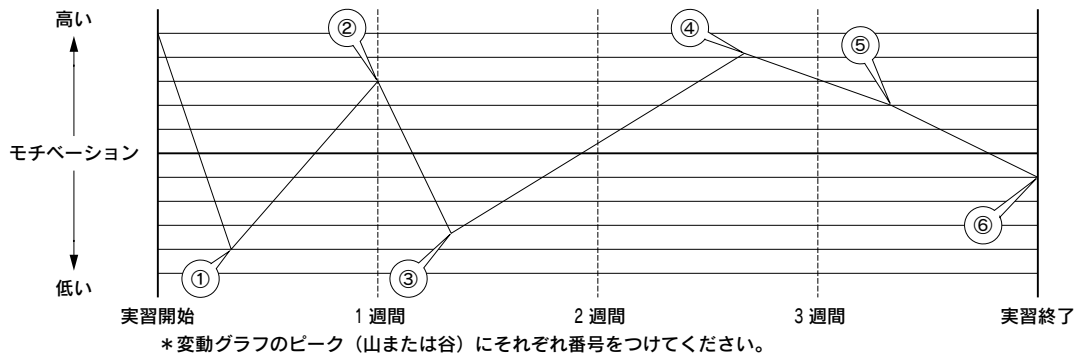
## 実習生D（グラフ④）

### 〈分 析〉

実習開始当初、実習生Dは、自分自身にとっての、また、子どもにとっての「自主性」を尊重するということをテーマに掲げながら実習に取り組むことになる。しかしながら、スーパーバイザーから、「援助者」としての「自主性」の尊重ということは実習生Dの認識することとは違うことに気づかされる（要因①）。実習生Dは、炊事・洗濯等、職員の日常業務の一部を子どもに任せて見守ることを「自主性」として単に捉えていたが、スーパーバイザーからは、業務の一部を「子どもに任せることでのメリット・デメリットを十分に吟味する」ことの大切さを問われている。日常業務の流れと、子どもとの関係づくり、支援のあり方に実習開始当初は試行錯誤を繰り返している様子である。しかし、「時間の経過」から、日常業務に慣れ、また、「子どもの名前を覚える」ことを手がかりに子どもとの関係づくりも積極的に取り組むようになり、一週間が経過した

## 実習生 D (グラフ④)

■実習開始から実習終了までの自分のモチベーション変動



①	自主性を大切にと施設の方から説明を受けていたが捉え方が食い違い失敗する。
②	徐々に名前を覚えやるべきこともわかるようになった。
③	女子棟に配属され避けられるようになる。
④	子どもにも受け入れられ学びが多くなり楽しくなる。
⑤	学校が始まり子どもたちがいない施設を経験。
⑥	別れが近づいてきて寂しい気持ちになる。

時点で、初日からの自身の行動を振り返ることも出来ている（要因②）。

2週間目に入り間も無く、配属先の異動があった。「業務に慣れる」こと「子どもとの関係づくり」に再度取り組む必要性を感じている（要因③）。また、青年期の異性に対する支援であったり、「子どもの試し行動」から、「子どもとの関係づくり」の難しさを再認識したのと同時に、精神的にも疲労感を感じている。

しかしながら、ここでも「時間の経過」から業務に慣れること、また、「子ども同士の関係性」、「子どものコミュニティ」を理解しようとし、観察を繰り返した結果、「実践での学び」に充実感を持ち始めていることが伺える。なお、実習日誌には、徐々に、子どもの生活背景などケースを分析することを目的とした記述が見られるようになる。

実習も最終週に入り、夏季休暇を終え、学校が始業する。子どもと関わる時間は物理的にも減少することになり、日中は、清掃活動などに従事する（要因⑤）。児童との関わり、実践での学びに充実感を覚え始めていたこともあり、モチベーションが下がり始める。実習最終日になると、実習を振り返ることで、これまでの経験していないことを体験できたという「学びの場」としての充

実感を得ている反面、社会福祉「援助者」として、子どもに対して対応できなかったという課題を解決できないまま実習を終えることに反省の色を見せている（要因⑥）。

## 〈考 察〉

実習開始当初、不慣れな環境・日常業務になれること、また、専門性の必要性をスーパーバイザーから指摘されることにより、「子どもとの関係づくり」においては専門性の壁を感じることになる。しかし、実習開始当時から積極的な姿勢を持っており、「時間の経過」とともに業務に慣れ、子どもたちの名前を覚えることで関係性を持つことが出来、克服しようとする努力が見られる。

「配属先の異動」では、毎回、実習当初と同様、壁にぶつかり、心身ともに疲労感を持つが、「時間の経過」によって、克服するのと同時に、子どもたちのコミュニティを理解しようとしたり、ソーシャルワーク的な視点を持つことができるようになっていく。実践での学びに対する意欲が高く、充実感も持っているが、各棟に慣れ始めたころに異動となるため、社会福祉の「援助者」としての経験、また、達成感が得られなかったのではないだろうか。



## 実習生 E (グラフ⑤)

### 〈分 析〉

実習開始から、2～3日の間、施設の一日の業務、担当児童の特徴、関わり方に戸惑いを感じていることが伺える（要因①）。特に、子どもとの関わりに関しては、「援助者」としての意識の欠如から、「何気ない一言で相手の誤解を招く」という状況を経験し、言葉によるコミュニケーションに対して慎重な姿勢を保つことを心がけようとしている。

一週間が経過したあたりから、「時間の経過から業務に慣れる」、また、「子どもの名前を覚える」ことで担当児童への援助以外で、施設全体に関心が移り、心理療法などの場に対しても積極的に学びを得るための行動が伺える（要因②）。さらに、配属先の異動では、実習生 E の関心の強い、幼児棟の担当となり、子どもとの関係づくり、業務に関しても積極的な行動は継続されている（要因③）。

また、積極的な姿勢を保つことで、「援助者」としての行動を意識するようになる。しかし、実習生 E の持つ経験、知識、スキルでは、「援助者」としての意識はもつものの、実際の実践には結びつかないようである。壁を感じ悩んでいる

時、休日に友人と会話をする中で実習から逃避したい思いを持つ（要因④）。さらに拍車をかけて、休日明けからは「配属先の異動」が予定されており、加えてそこは「厳しい場所」であるというわさを聞かされている。

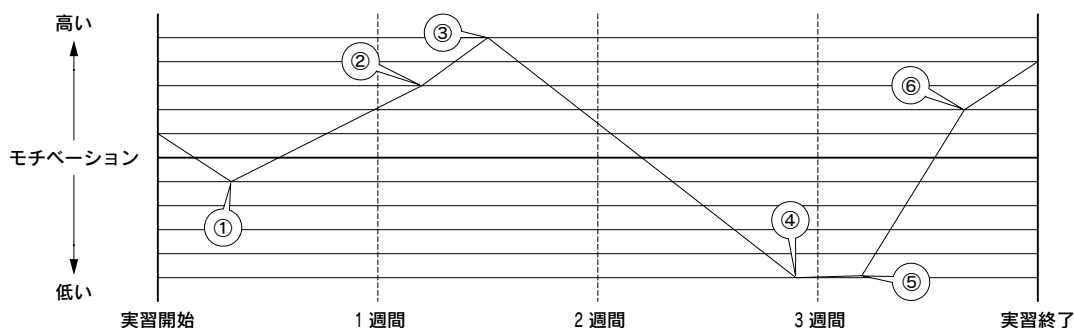
このような不安が高いまま、実習が再開される。最終週でありながら、「積極的に関わることが課題」であるとし、受け身な姿勢で実習に取り組むことになるが、客観的に自身を反省していることも同時に伺える。2～3日間、実習当初から繰り返している「時間の経過から業務になれる」ことで、次第に「子供への積極的なアプローチ」を自身のテーマとし、不安を克服するための行動も見える（要因⑥）。子どもへの関心も高いまま、実習を終了し、充実感を持つことができている。

### 〈考 察〉

実習生 E は、「援助者」としての意識を高く持っていたとはいえない状況で実習を開始し、「子どもとの関わり」の中で、援助者としてのスキルや知識の必要性を気づかされることになる。「時間の経過」により、業務にも慣れ、次第に専門性を意識するようになる。しかし、「配属先の

## 実習生 E (グラフ⑤)

■実習開始から実習終了までの自分のモチベーション変動



\*変動グラフのピーク（山または谷）にそれぞれ番号をつけてください。

①	初日からしばらくはどう接して良いかわからず緊張の日々。
②	男子棟の子の名前も覚えて仕事にも慣れてきた頃。
③	新たに幼児棟に移った時 可愛いと思えた頃。
④	子どもとの関わりがうまくいかず落ち込んでいた。休日に友人と話すことで無性に帰りたくなった。
⑤	休日明けに戻るのが女子棟で、他の実習生から厳しいと聞いていたので怖かった。
⑥	聞いているよりも大丈夫で、関わりもうまくいきたし、落ち込むこともあったが充実した日々。

異動」、それに伴い対象児童が変わるごとに、また「援助者」としての意識を持ち行動するには「時間の経過」を必要としている。

悩みの中、迎えた休日には、友人とコミュニケーションをとるが、それが逆に実習施設での生活から逃避したい思いを生む結果となった。さらには、「うわさ話」によって、精神的にも揺さぶられる状況となる。実習生 E においては、担当棟が異動する場面、場面において、援助者としての意識を保ち、また業務に順応するために常に一定程度の時間を必要とし、実習期間中これを繰り返すことになる。

## 5. 結 論

実習に対するモチベーション変動に影響を与える要因について、以下の3点が考察された。

まず1点目に、実習へのモチベーションに大きく関わる要因として、「子どもとの関わり」が挙げられる。そこには、実習生が思い描いている子どもたちとの理想の関係と、試し行動等に困惑する現実とのギャップが見受けられる。それまでのボランティア経験や、大学で学んだ専門知識を振りかざしても、簡単には子どもとの関係に変化は見られない。

また、子どもたちに対して、職員のように叱ったり、注意をしようとする、「実習生のくせに」という言葉が返ってくる。その結果、どうすれば良いのかわからなくなり、その戸惑いがモチベーションの低下に繋がっていく。

このような状況を招く原因として、実習生が「子どもたちに専門的な援助をする者・指導をする者」として関わろうとし、その前段階に必要な「人と人としての関わり」が抜け落ちてしまっていることが考えられる。

しかし、児童養護施設実習では欠かせない家事や入浴等、日常生活の些細な場면을積み重ねることで、そのような身近な関わり的重要性に気づく。そして、「援助者」や「実習生」である前に、「ありのままの自分」を表現することから子どもたちとの関係づくりが始まっていくことを学んでいる。

2点目は、「時間の経過」による実習生の視野の

変化である。実習1週目は「子どもとの関わり」や不慣れな施設での生活による「戸惑い」の時期である。2～3週目で、上記の「ありのままの自分」を表現することの大切さに気づき、克服していく様子が伺える。そして、最終週あたりでは、それまで「自分と子ども」という1対1の関係で子どもを捉えていたのが、子どもの周りの環境や施設生活のメリット・デメリット等にも目を向けて、実習を行っていることが明らかとなった。

実習生にとって一番の関門である「子どもとの関わり」という課題を乗り越えると、徐々に子どもの捉え方も変化し、ソーシャルワーク実習を行っている実習生自身が実感できることが、モチベーションの上昇に影響を与えていると思われる。

最後に3点目は、実習プログラムによるモチベーション変動への影響である。実習生 D、実習生 E は、実習期間中に男子棟、女子棟、幼児棟すべての棟をまわっている。子どもの性別、年齢による違いを見ることはできたと考えられるが、慣れてきた頃に異動し、また「子どもとの関係づくり」から始めることになる。2点目に述べたように、子どもに対する捉え方に変化が見られたり、周りを見渡せる視野の広がりを持つには、「時間の経過」が必要である。よって、課題にぶつかり、気づき、克服し、達成感を得るためには、実習施設や巡回担当教員から、これまでの異動前と異動後の実習に連続性を持たせる働きかけが必要なのではないだろうか。

## 6. 研究の限界と今後の課題

以上3点について述べてきたが、本研究の結論は限定的であることを付記しておきたい。本研究は筆者らが所属する大学の学生、中でも今回は児童養護施設において宿泊実習を行った5名のみを研究対象としている。本研究が探索的研究であり、実習日誌等、学生の個人情報を対象とした調査を実施しており、調査協力を得られる対象が限定されていることからサンプリングに限界が生じている。なお、研究方法については、今回の結果を振り返り、モチベーションシートの構成など再度見詰め直し、調査設計においては、妥当性を高

めるためにも学生へのヒアリング調査も検討すべき事項である。

また、今後は、上記の課題を踏まえ、実習生のみを対象とするのではなく、社会福祉における人材育成を共通テーマに持ち、実習生を受ける側の現場、送り出す側の大学教員へのアプローチを検討し、3者間の協働による実習プログラムの開発を視野に入れ研究を進めていきたいと考える。

#### 〈引用・参考文献〉

- ・稲垣美加子 (2005) 「ソーシャルワーカー養成における「社会福祉援助技術現場実習」の意味と位置づけ—専門職としての視座の構築へのアプローチ—」『人間福祉論集』3, 1-13.
- ・今栄国晴・清水秀美 (1994) 「教育実習が教員志望動機に及ぼす影響 事前・事後測定法による分析」『日本教育工学雑誌』17(4), 185-194.
- ・イン, R. K (1996) 『ケーススタディの方法』(藤公彦訳) 千倉書房.
- ・北川清一・久保田理雅・加藤純 (1998) 「本学『社会福祉援助技術現場実習』(児童施設) の教育効果に関する一研究」『テオロギア・ディアコニア』32, 81-97.
- ・立石宏昭 (2005) 『社会福祉調査のすすめ』ミネルヴァ書房.
- ・遠塚谷富美子・一村小百合・遠藤和佳子 (他) (2005) 「共同研究報告社会福祉実習教育モデルについて」『関西福祉科学大学紀要』9, 293-321.
- ・日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会 (編) (2001) 『新社会福祉施設現場実習指導マニュアル』全国社会福祉協議会.
- ・野崎真奈美 (1999) 「初めての臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた状況の分析」『日本看護学会論文集』30, 44-46.
- ・野津牧 (2004) 「児童養護施設における実習の今日的意義」『名古屋芸術大学短期大学部研究紀要』36, 39-52.
- ・バビー, E (2005) 『社会調査法2—実施と分析—』(渡辺聡子監訳) 倍風館.
- ・パンチ, K. F (2005) 『社会調査入門—量的調査と質的調査入門—』(川合隆男監訳) 慶應義塾大学出版会.
- ・渕上克義・島田俊秀・園屋高志 (1992) 「教育実習の事前・事後指導に関する基礎的調査研究 (Ⅱ)」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』39-45.
- ・フリック・ウヴェ (2002) 『質的調研究入門』(小田博・山本則子・春日常・宮地尚子訳) 秋春社.
- ・牧野哲治 (2005) 「児童養護施設における実習現状 児童養護施設現場職員から見た今日の児童養護施設実習現状」『福祉教育開発センター紀要』2, 99-109.
- ・丸山仁 (2004) 「社会福祉援助技術現場実習に求められる内容と枠組み」『新潟青陵大学紀要』4, 143-156.
- ・幸重忠孝 (2002) 「社会福祉実習における学生へのソーシャルサポート～児童養護施設の実習から～」『花園大学社会福祉学部研究紀要』10, 73-82.
- ・和田美知子 (2002) 「教職課程履修学生の実習観に関する研究—特に、「履修動機」と「教育実習」について—」『城西大学女子短期大学部紀要』45-51. 大学出版会.

## Exploring change of students' motivation and factors affecting it in residential practicum at nursing institutions for children from analysis of their journals.

### ABSTRACT

The quality and quantity of social work practicum is recently an oft-discussed topic. In considering it, it is most important that there be cooperation among institutions, schools, and students in thinking about the training program. The first step in this consideration is to examine students' motivation change during the time they are engaged in the practicum. We feel it is necessary not only to analyze motivation, but also to observe and report on how motivation changes over time. The purpose of this paper thus is to research motivation, and explore the factors which affect students' motivation and any changes in their motivation.

We chose five students who have experience in a residential practicum at nursing institution for children. We then analyzed their journals and papers which show changes in their work motivation and factors affecting those changes. One result of our research is that we found there are three factors that affect changes. The first factor was "the relationship with children". Students wonder about the gap between reality and the ideal and had difficulty in expressing themselves in front of children. The second factor was "the change of vision by progression of time". First students freeze on one-to-one relationship with child. Then they paid greater attention to child's environment and merits and demerits of institutional care life. The third factor that affects motivation changes was found to be "the training program". As soon as students began to get more accustomed to their circumstances, they had to transfer or move to a different section or sections, and began again "making relations with the child".

We suggest that both the supervisor and practicum instructor need to work more carefully and attentively with students in order to maintain the continuity of practicum training so that students can more deeply consider what they must do in their work.

**Key Words:** Social Work Practicum, nursing institutions for children, motivation